

東京で(国)境をこえる

2020年度活動記録

2021.3.31

『東京で(国)境をこえる』とは

『東京で(国)境をこえる』は、多くの在留外国人や海外にルーツを持つ人々が生活する東京で、「東京には見えないことにされている様々な壁がある」という仮説をもとに、その「見えない(国)境、壁」について考察するアートプロジェクトです。東京に生きる人々、特に外国にルーツを持つ人々が感じる個人と他者／社会／世界との境界と、それにまつわる問題を探りながら、日常的に出会う場を生み出す拠点(コミュニティ)の形成を目指します。

私たちは、様々な国から集まった異なるアイデンティティを持つ人たちが、共に何かを作り上げようとするとき、そこでは結果的に、国籍や文化的背景にとらわれない、「個人」を尊重したコミュニケーションが生まれると考えます。そうした「個」の集合体として、ゆるやかで柔軟なつながりを育てることを意図して活動を展開します。その中で得られる経験と知見は、これからの共棲を考えるために必要な気づきと自由をもたらすものだと思っています。

『kyodo20_30』とは

- 10年後の2030年に社会を担う20歳から30歳の若い人たちと、国籍・言語・文化などにとらわれずに展開するアートプロジェクトです。
- 『東京で(国)境をこえる』のテーマである「見えない(国)境、壁」を意識しながら、様々なクリエイションを行い、議論や理解を深めるプロセスを重ねていきます。
- 東京都世田谷区の〈経堂〉を拠点に、ワークショップ・レクチャーを通して〈協働〉し、自分と異なるアイデンティティを持つ相手と、これからの〈共同体〉について考えるプログラムです。
- プロジェクトの中心は主に“プレイヤー”と“コラボレーター”と呼ばれる人々です。プレイヤーは『kyodo 20_30』を能動的に動かし、彼女らと共に対話やリサーチをするためにプロジェクトを準備してきた“コラボレーター”が並走します。

※ 2020年度の『東京で(国)境をこえる』は、コロナ禍の活動において『kyodo 20_30』のみに注力しました。

What is Beyond Invisible Borders ?

Beyond Invisible Borders is an art project where we will reflect on “invisible borders / walls” based on the hypothesis that there are many invisible walls / obstacles for many foreign residents and people with international backgrounds in Tokyo. Its purpose is to create a community, where residents in Tokyo—whether Japanese or foreign—can meet on a daily basis, while exploring these invisible borders faced by Tokyo residents (foreign residents in particular) and the problems caused by them.

We feel that, when people from various countries with different identities try to create something together, it results in them communicating with each individual with more respect regardless of their nationalities or cultural backgrounds. Our activities aim to rear these soft and flexible relationships within this group of individuals. We believe that these activities will give us experience and knowledge that will help us obtain the freedom and realization that are necessary for our co-existence in the future.

What is kyodo 20_30 ?

- An art project where we collaborate with youth aged 20-30 who will be responsible for our society in 10 years (in 2030).
- Through various creations in regards to the “invisible borders / walls” which is the theme of Beyond Invisible Borders, we will have discussions and go through multiple processes for mutual-understanding.
- This program is based in Kyodo, Setagaya-ku in Tokyo, and it encourages participants to collaborate (kyodo) with people with different identities through workshops and lectures, and reflect on our future community (kyodo-tai).
- The project will be mainly run by what we call “players” and “collaborators”. The players will be the engine of the “kyodo 20_30” project, while the collaborators, who have been involved in the preparations of the project to facilitate dialogue and research with the players, will supplement their activities.

2020年度の活動タイムライン

新型コロナウイルス感染症対策として、東京を含む7都府県に緊急事態宣言が発出される。
(5月7日に解除予定とされた)

4.7

4.3

東京都より東京アートポイント計画における新型コロナウイルス感染症対策に係る対応方針が出され、公開プログラムの実施は7月以降、その告知は6月以降に行うことになる。

4.10

事務局とアーツカウンシル東京で初めてのオンラインミーティング実施。
以降ミーティングはオンラインで行われる。

4.19

プロジェクト準備メンバーと初めてオンラインツールを使用。
次回よりこれを「プロジェクト準備会」とした。

5.5

緊急事態宣言が5月31日まで延長される。

5.3

プロジェクト準備会#1オンライン実施。

5.17

プロジェクト準備会#2オンライン実施。

5.19

コロナ禍における活動の記録として、「自撮り映像日記」を開始。

5.31

プロジェクト準備会#3オンライン実施。

6.7

プロジェクト準備会#4オンライン実施。

6.14

プロジェクト準備会#5オンライン実施。

7.4

プロジェクト準備メンバーの有志で、オンライン読書会#1を実施。

6.21

プロジェクト準備会#6オンライン実施。

6.28

プロジェクト準備会#7オンライン実施。

7.5

プロジェクト準備会#8オンライン実施。

7.18

有志によるオンライン読書会#2を実施。

7.12

プロジェクト準備会#9オンライン実施。

7.19

プロジェクト準備会#10オンライン実施。

7.26

準備会#11実施。久しぶりに対面実施。品川の街を歩く。

8.8

有志によるオンライン読書会#3を実施。

8.2

プロジェクト準備会#12オンライン実施。

8.12

東京で(国)境をこえるホームページ開設。
kyodo 20_30参加者「プレイヤー」を募集開始。

8.9

プロジェクト準備会#13オンライン実施。
ゲストに多文化保育イニシアティブ代表で、日本語教師、保育士の山田拓路さんを招く。

8.16

有志によるオンライン読書会#4を実施。

8.23

プロジェクト準備会#14オンライン実施。

8.30

kyodo 20_30オンライン説明会リハーサル実施。

9.6

kyodo 20_30オンライン説明会をYouTubeライブ配信にて実施。

9.27

kyodo 20_30#1を実施。綾田 将一さんによるワークショップを行う。

10.18

有志によるオンライン読書会#5を実施。

10.10

kyodo 20_30#2を実施。参加者の自己紹介を行う。

11.1

有志によるオンライン読書会#6を実施。

10.24

kyodo 20_30#3を実施。経堂の街を歩く。

11.15

有志によるオンライン読書会#7を実施。

11.7

kyodo 20_30#4を実施。「見えない壁や境界」について話し合う。

12.6

有志によるオンライン読書会#8を実施。

11.21

kyodo 20_30#5を実施。引き続き「見えない壁や境界」について話し合う。

12.24

東京都より、アーツカウンシル東京が主催・共催する対面型事業の中止要請が出される。
(1月11日まで)

12.5

kyodo 20_30#6を実施。野村プリシラさゆりさんによるワークショップを行う。

12.27

有志によるオンライン読書会#9を実施。

12.19

kyodo20_30#7を実施。テーマごとの分科会となり、4つのグループに分かれる。

12.28

東京都の対面型事業の中止要請を受け、主催者間で協議の上1月9日に実施予定だったkyodo 20_30#8を、1月17日に延期決定。
有志によるオンライン忘年会を実施。

1.9

kyodo20_30#8の開催日だったが、1月17日に延期。

1.7

新型コロナウイルス感染症対策で、2回目となる緊急事態宣言が1都3県に対し発出される。
(2月7日に解除予定とされた)

1.17

kyodo20_30#8をオンライン実施。
ゲストに大阪市立大学都市文化研究センター研究員のケイン樹里安さんを招く。

1.24

有志によるオンライン読書会#10を実施。

1.23

kyodo20_30#9をオンライン実施。アクションに向けて準備する。

2.2

緊急事態宣言が3月7日まで延長される。
緊急事態宣言延長に伴い、成果発表の場「経堂万(国)博覧会」の中止を決断。

2.13

kyodo20_30#10をオンライン実施。最後のプログラム日。「経堂万(国)博覧会」の代わりとなる成果発表を「アクションを準備したプロセスの冊子制作(制作ノート)」とし、そのためのレクチャーを行う。

2.14

有志によるオンライン読書会#11を実施。

2.27

任意参加の冊子制作相談会をオンラインで実施。

3.20

有志によるオンライン読書会#12を実施。

3.25

冊子集発行。

3.31

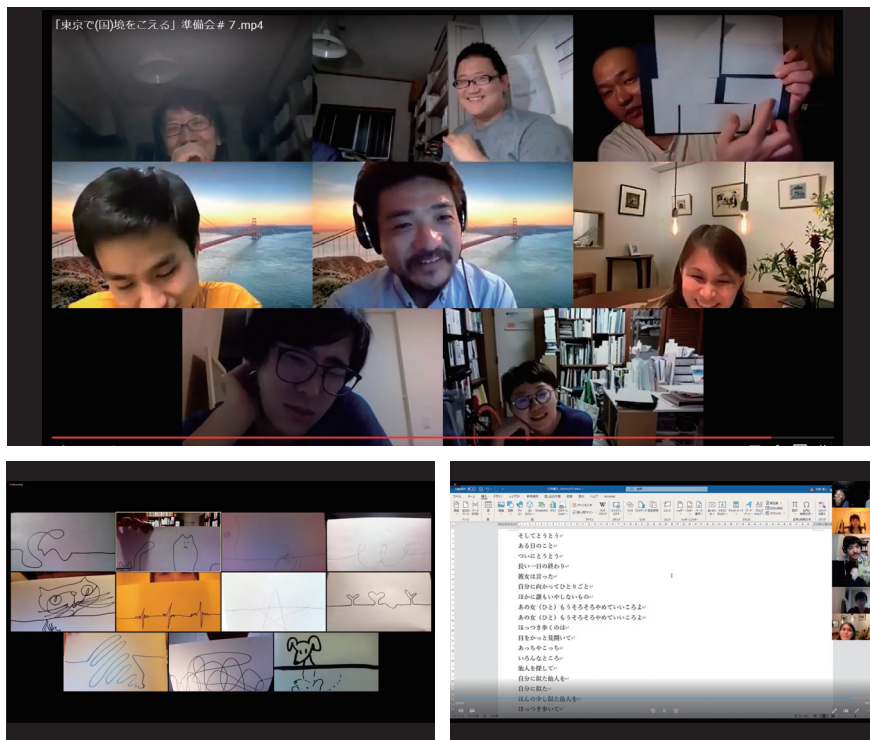
有志によるオンライン発表可能な成果物を、東京で(国)境をこえる公式YouTubeチャンネル「Beyond Invisible Borders」にて公開。

2020年4月19日～8月23日
プロジェクト準備会(オンライン)

4月3日に東京都より東京アートポイント計画における新型コロナウイルス感染症対策に係る対応方針が出されました(タイムライン参照)。そのため当初予定されていた『kyodo 20_30』の6月のキックオフは延期を余儀なくされ、コロナ禍におけるアートプロジェクトの姿勢について話し合う時間が持たれました。プロジェクト準備会の後半は、9月末に『kyodo 20_30』を仕切り直す方向で、その準備が進められました。

Zoom会議／オンラインワークショップ／
10ミニッツメイド

4月から始まった準備期間は、9月以降のプラン作成など話し合いが中心となりました。しかしそれに留まらず、音声やテキストを用いて画面越しでも実施できるワークショップや共同制作など、オンラインならではの活動も試みました。



自撮り映像日記

オンラインでも行える共同制作として実施した『自撮り映像日記』。ときに他の参加者への呼びかけもや質問も交えながら、個々人の考えや体験にまつわる語りを撮影した映像は、結果的にコロナ禍という非常事態における日常の記録にもなりました。



フィールドワーク

コラボレーター富田充さんのガイドのもと、彼が当時住んでいた品川旧東海道エリアを歩きました。『鈴ヶ森刑場跡』から出発し『鯨塚』まで。それは、さながら歴史に埋もれた「見えない壁や境界」を探す小旅行でした。



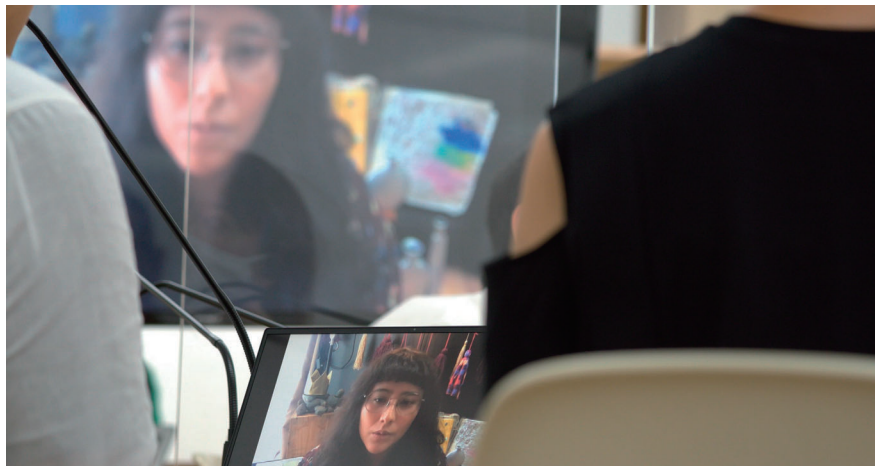
2020年9月6日

kyodo 20_30 説明会(オンライン)

『東京で(国)境をこえる』のプログラム第一弾『kyodo 20_30』の参加者を募るための説明会を、YouTube live配信を活用して行いました。その配信はアーカイブとして、東京で(国)境をこえる YouTubeチャンネル『Beyond Invisible Borders』でご覧いただけます。配信は、『アーツ千代田3331』にある『ROOM302』から行いました。

説明会の様子

8名のコラボレーターと4名の事務局で、『kyodo 20_30』の趣旨やプログラムの予定、各々の自己紹介などを行いました。この放送が『kyodo 20_30』を知ってもらうきっかけのひとつとなり、10名のプレイヤーが集うこととなります。



2020年9月27日～10月24日

kyodo20_30 PHASE 01

全3回<出会う&知り合う>

この期間は、プログラムの参加者がお互いを知るためのステップです。参加者全員で身体を使ったワークショップを行ったり、自己紹介、そして経堂の街と出会うための時間になりました。プログラムを通して、その後のリサーチやワークショップを進めていくためにみつつの「きょうどう」「共同」「協働」「経堂」を探っていきましました。

コラボレーターワークショップ

(綾田将一さん)

プレイヤーも加わって行われた最初のプログラムです。グループに分かれて未来の東京のイメージを話し合い、そのイメージを身体表現を通して共有するなど、身体を使ってコミュニケーションを試みるワークショップを行いました。



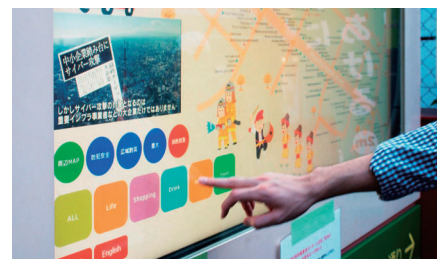
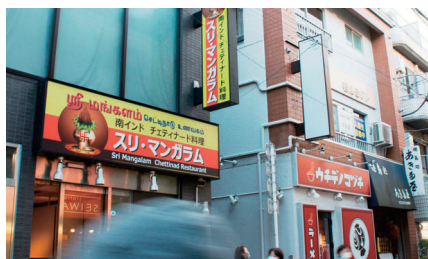
自己紹介

言葉を介さないコミュニケーションを試みたワークショップに続くプログラムとして、改めて自己紹介を行いました。参加者それぞれの経歴や興味関心の対象などを、プレゼン形式で紹介しました。



経堂街歩き

『kyodo 20_30』のテーマには、“共同”と“協働”だけでなく“経堂”も含まれています。経堂の街にはどのような景色があり、どのような人が暮らしているのか。街を歩きながら探り、話し合いました。



2020年11月7日～12月5日
kyodo20_30 PHASE 02
全3回 <試す&つくる>

“プレイヤー”と、彼女らと協働する“コラボレーター”が一緒になって、本格的に考察と実践を行うステップです。考察のためにそれぞれの経験を語りあったり、「コロナ禍」「分断」をテーマにしたドキュメンタリーを見たりしました。コラボレーターが企画したワークショップも開催し、次のPHASE 03に向けて共同制作の足掛かりとしました。

プレゼン

『kyodo 20_30』の最終目標は、参加者それぞれが自らの関心をベースにしつつも、他の参加者と共に共同制作を行うことでした。そのための準備段階として、プレイヤーがプロジェクトで取り組みたいアクションについてプレゼンを行いました。



ディスカッション

共同制作を行うには、自らの関心から距離をとった客観的な視点を持つことも必要となります。そのための手がかりとして、ドキュメンタリー映像『東京リトルネロ』を題材に、身の回りから少し離れたテーマについてディスカッションを行いました。



コラボレーターワークショップ

(野村プリシラさゆりさん)

コラボレーターによるワークショップの第2弾です。1枚の亚克力シートの上に参加者全員で絵を描き、さらにその亚克力シートを切り取ったりつなぎ合わせたりして、「境界」をテーマにしたひとつのオブジェクトを制作しました。



2020年12月19日～2月13日

kyodo20_30 PHASE 03

全3回 <問いをみつける&アクションを試す>

PHASE 01、02で重ねてきた“kyodo”をもとに、プレイヤーが新たな問いを見つけていきます。その問いから生まれるアクションを、コラボレーターと共に考えていきました。2021年に入ってから、新型コロナウイルスに伴う緊急事態宣言が発出され、プログラム終了までオンラインで行われることになります。

分科会 #1

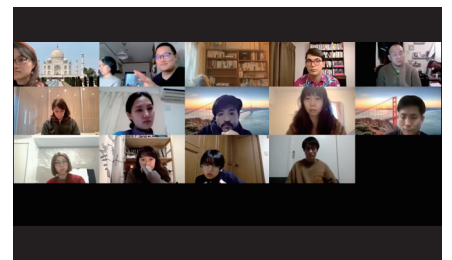
『kyodo 20_30』の成果発表に向けて、4チームに分かれての活動を開始しました。「記号/共感」「感情」「呪い」「環境」というテーマのもとそれぞれ集まったチームで、チームのコンセプトの練り上げや、成果発表のアイデア出しなどを行いました。



レクチャー

(ケイン樹里安さん)

『kyodo 20_30』のコンセプトには、異なるルーツを持つ人々との協働というテーマも含まれています。ときに軋轢を生じることもある別々のルーツを持つ人々の交わりに対して、どのように向き合うべきなのか。ハーフ研究などを専門とする社会学者のケイン樹里安さんにお話を伺いました。



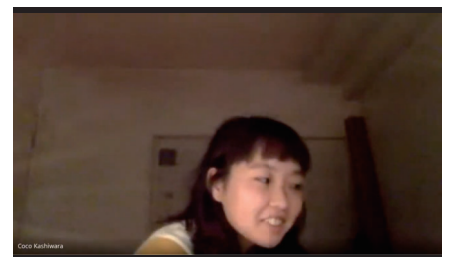
分科会 #2

緊急事態宣言の再発令によって、対面ではない形式での成果発表の方法を模索する必要に迫られました。そのためウェブ上での展覧会やシンポジウムのライブ配信など、オンラインでの実施を視野に入れた準備が各チームで進められました。



分科会 #3

2月7日までを予定していた緊急事態宣言が延長されたことで、成果発表展『経堂万(国)博覧会』の正式な中止が決定しました。ここから『kyodo 20_30』の成果物として、各チームによる制作ノートの編集作業がスタートしました。



<発表する>

本来『kyodo 20_30』の成果発表は、2021年2月にオフラインでの開催『経堂万(国)博覧会』を目指していました。しかし、コロナ禍において、その開催は困難なものとなりました。その成果発表に代わり、別のかたちの成果として、参加者が4つのグループに分かれてそれぞれの視点から活動のプロセスを記録した制作ノートとしてまとめました。

グループ1

テーマ：記号化／共感

STEP1: 自習(日記)

STEP2: アドミニアップ、自と誰かの反応を見て、感想や気づきを共有しての発表を行います。

STEP3: 発表の準備

STEP4: 発表

STEP5: 振り返り

グループ2

テーマ：感情

A. 感情表現の練習

1. 導入

2. 練習

3. 発表

4. 振り返り

グループ3

テーマ：呪い

作成台本 (第3稿)

第1稿: 台本

第2稿: 台本

第3稿: 台本

第4稿: 台本

グループ4

テーマ：環境

スピード感に抗ってみる

視察情報

散歩体験：ゆっくりとした時間を取り戻す

デジタルにデジタルを差し込む

言葉の重み

お散歩のシェア

言葉の重み

後田 将一「お散歩論」

お散歩は、
準備が心算だ。
重い荷物と違って、
心と体を軽くして、
肩とあけて、緑とこえよう。

「お散歩論」

参加者の声

- 対話の大切さ。出会えることの貴重さ。人って面白い。ことを、改めて感じました。
- 芸術との関わり方、趣味として以外の距離感をみつけようとより能動的になりました。
- 具体的には、ファシリテーションスキル、イベントを運営する際の身体感覚など。抽象的には、気持ち的なところでたくさん助けられました。特に昨年の4月から夏までのコロナ禍では、リアルの生活に知り合いもおらず、友達が全員東京にいて会えない中で、このプロジェクトが唯一、気を使わずに本音で人と話せる場所でした。
- 分科会によってできたグループのテーマが合っていたこともあると思いますが、日常の中でアートを考える場面が増えたことは自分にとって大きな収穫でした。
- ファシリテーションとクリエイションが、より密接に一体化した感がある。アートとライフも、よりつながった。特にチームのメンバーと、会う回数や頻度も少なかったのに、リモートだったのに、その感覚を共有できたのは何よりの支えであり収穫だった。
- 自分の周りにもたくさんの境界線に気づくようになった気がします。
- 早く対面で活動できるといいね。
- 素敵な参加者の方たちに会えてよかったです。

2019年の10月に本プロジェクトのキックオフイベントを開いたときにはまさか、2020年がこのような新型コロナウイルスのパンデミックに襲われるとは思ってもありませんでした。その後半年間、2020年3月に至るまで私たちはこのアートプロジェクトの趣旨である、

—「東京には見えないことにされている様々な壁がある」という仮説をもとに、その「見えない(国)境、壁」について考察する—

このことを実現するためにどのような具体的なプログラムが開催可能か？ について、チームビルディングを兼ねつつ継続的にディスカッションやワークショップを重ねてきました。

2020年初春。世界がコロナ禍に突入し、アートプロジェクトに限らず人と人が集うという、人類史上、人類がたゆまず行ってきた営為のほとんどすべてが徹底的に制限される状況下で、しかし私たちは対面での事業開催にこだわって、というも、人と人が直接に相対することでそこに生まれる余剰、余白のようなものは、リモートやオンラインでは代替出来ないものだと信じていたから、そしてそれこそが、人と人との交歓を生み出すものだと考えていたからなのですが、予定していた『kyodo 20_30』というプログラムも内容を改変し、開始時期を延期して対面の事業として実施・運営してきました。

『kyodo 20_30』とは、10年後の2030年に社会を担う20歳から30歳の若い人たちと、国籍・言語・文化などにとらわれずに展開することを目的としたプログラムです。

本アートプロジェクトの拠点である経堂アトリエで、集まったメンバーで協働をし、そして新しい共同体を作ろう。それは来るべき多文化共生社会における一つの新しいモデルケースとなるだろう。そこでは単に多様な人々が共棲するだけでなく、何らか、何にしても、一つのクリエイションを共にすることにより、個と個が、互いの違いを前提にし、それを尊重しつつも、何かしらを共有出来るような、新しい信頼関係を持った共同体(コミュニティ)が生まれるのではないか。

そんな思いをもって私たちはこの『kyodo 20_30』というプログラムを開始しました。

コミュニティというのは元来、自然発生的なものです。家族、地域社会、国家など、それぞれのレイヤー毎に存在するコミュニティには、もちろん様々な意義や、意味、目的が存在します。ですが、どれをとってもそれらの意味や意義、目的はやはり後付けであるということがいえると思います。僕は社会学者でも文化人類学者でもないので、生半な知識で論を展開するのはここでやめにしますが、私がここで強調したいのは、新しいコミュニティを人工的に作り出すのは、非常に難しいということです。

何らかを目的としたチームや企業などの組織であればそれは別です。組織は、それが営利目的であれ非営利目的であれ、何らかの目的があり、一般に何かを作り出すことを想定しています。しかし、自然発生的なコミュニティ、共同体はどうでしょうか。明確な目的、目標のない、組織ではないそれはどのようにすれば、人工的に生成することが可能なのでしょうか。

今回、ディレクターとして私がいちばん頭を悩ませたのはその点でした。私は、shelfという劇団の代表で、演劇の演出家です。ですから例えば、私が作りたいものを作るために人を集める＝組織するということはさほど難しくありません。いや、それはそれで難しい作業ですが、長年そのことに注力してきた私はその手法を少なからず知っています。

一方で、コミュニティ『kyodo 20_30』は、何か分かりやすい共通の達成目標を持った組織ではありません。

コミュニティを作るということはコミュニティを作るということが目的であって、例えば劇団を作るということが演劇制作をその目的とするように、その外側に目的を持たない。

そのようなコミュニティのあり方を『kyodo 20_30』は目指していました。例えばそれが結果的に目標、目的として表現することを選ぶとして、しかし、その表現ジャンルや媒体に決まりはなく、あるいは社会運動のようなものを目指すとしても、集まりの最初から特定の成果を生み出すことは期待されていない。しかも座っているだけで何かを得られることが約束された学校のような場所でもなく、あくまで自発的に、そこで初めて出会った他者と共に何かを為すことを期待されている場所。もちろん、何もしないことも許容された場所ではありましたが、いずれにしても乱暴な話です。人を集めておいて、何をすべきか指示は一切しない。教えることもしないのですから。

ただ一つだけあった参加者への要望は、先に述べた、東京には見えないことにされている様々な壁がある」という仮説をもとにその「見えない(国)境、壁」について一緒に考察しよう、ということ。さらにはその過程において、考察の結果を何らかの「問い」として、出来ることなら、他者、あるいは社会と共有可能なかたちにして発表して欲しい。というものでした。

それがどこまで実現出来たのか。出来なかったのか。

『kyodo 20_30』の1年目を終える時期に来て、ディレクターとして反省点はいくつもありますが、それでも得るものは確実にありました。何より、協働(=共同制作)を前提としつつも、それを必須条件としたコミュニティでは、『kyodo 20_30』はありませんでした。にもかかわらず、このコミュニティ『kyodo 20_30』から、単に予定されていた成果発表にとどまらない、次年度以降に実を結ぶような種が

くつも生まれたこと。それもプレイヤーやコラボレーターから自発的に生まれてきたことは想像していた以上の収穫でした。

とはいえ、もちろんこの種はまだ芽吹いたばかりです。ですから来年度、出来れば再来年度以降も継続してこのコミュニティを育てていくことが、このプロジェクトにとって非常に肝要なことと信じています。

それから改めてここに思うことは、このコロナ禍を通して私たちが直面した、大量生産や、効率至上主義、あるいはスケール(動員数や、それが届く距離)を重視することばかりを是とした価値観を問い直すきっかけを、この事業が私たちに与えてくれたこと。それも単なる気づきのレベルではなく、実践のレベルでそれを行うことが出来たのは、この事業が東京都とアーツカウンシル東京との共催事業であったからこそであろう、と、切実に感じています。

個と個が、お互いの違いを前提にそれを尊重し合いつつ、協働する。共に手を動かし、汗を流し共同制作を行う、そのようなアートプロジェクトを継続的に行うこと。それこそがまさに、今までになかったような新しい、これからの時代に必要とされるような、共棲、多文化共生の時代を迎えるためのその一助となることを期しています。

『東京で(国)境をこえる』ディレクター、矢野靖人

**Director's Note:
Looking Back at the
First Two Years of
Beyond Invisible Borders**

Who would have known that 2020 would be a year of the COVID-19 pandemic, when we had our kickoff event for this project in October, 2019? For half a year since then until March, 2020, we had discussions and workshops on a regular basis to figure out, specifically, what kind of programs would be possible for us to organize in order to fulfill the purpose of this art project: "To reflect on invisible borders and obstacles based on the hypothesis that Tokyo has various invisible barriers", while facilitating team-building exercises.

The pandemic hit the entire world in early 2020, and we all have had to experience strict restrictions on art projects and group gatherings in general, even though the human race never stopped gathering together in human history. Under such a circumstance, we still wanted to stick to in-person programming for our project, and decided to run the project after having to change the program details of kyodo 20_30 and reschedule our calendar. It was because of our belief that online programming cannot substitute the "marginal exchange" between people in real life, which brings joy to the human connections.

kyodo 20_30 aims to involve those aged between 20 and 30 who will be in charge of society in 2030, regardless of nationality, language, and cultural backgrounds.

The program's vision was to collaborate with each other at Kyodo Atelier and make a brand-new community, in hopes that it will be a case study for the upcoming multicultural society, where people with various backgrounds not only co-exist, but also create something together and share mutual trust, while respecting individual differences.

Communities are by nature born spontaneously. Communities on different levels (ex. families, local communities, countries) obviously have their own meanings and purposes. However, no matter which community you look at, I think that the meanings and purposes attached to the community are given to it afterwards. I am not a sociologist nor an anthropologist, so I am not going to discuss my theory with my ill-equipped knowledge, but what I want to stress here is that it is extremely difficult to create a new, man-made community.

It's a different story, if it is a purpose-built organization such as an athletic team or a corporation. Organizations - whether for-profit or nonprofit, has some sort of purpose and generally aim to make something. But can we create "spontaneous" communities without clear purposes or goals?

That was what I had to think about a lot as the Project Director. I am the head of Theatre Company shelf, and I am a theatre director. So it is not difficult for me to gather people to create what I want to create. Well, it has its difficulties, but I have learned the methods to do so through my long experience.

However, kyodo 20_30 as a community is not an organization with a clear mutual purpose.

The end-goal of creating a community is to create a community itself, and has no external purpose - but creating a theatre company has the purpose of producing theatre.

We wanted kyodo 20_30 to be such a community with no clear purpose. Even if it ends up fulfilling some sort of purpose or goal or creating a social movement, we didn't want it to be restricted by any imposed, specific, expected outcomes of its existence. We also didn't want it to have some sort of "promise" like school does - the promise for you to learn something even if you just sit there. We wanted it to encourage people to voluntarily do something together with strangers. Of course, I made it clear that it's OK for them to do nothing, but honestly, it was very messy planning on my part - in a sense that I gathered people, but didn't instruct them what exactly they should be doing, or teach them how to do whatever they wanted to do.

The only request I had for the participants was, as I said earlier, to reflect on invisible borders and obstacles based on the hypothesis that Tokyo has various invisible barriers. I also asked them to present their findings in a form of some sort of questions, in a way that they can be shared with other people and the rest of society.

How much of that was achieved and was not achieved?

As the end of the first year of kyodo 20_30 comes nearer, there are so many things I wish I would have done differently, but I definitely have gained a lot from the experience as well. I am grateful that so many promising ideas came from the players and the collaborators despite the fact that this community, kyodo 20_30, didn't exactly require collaboration, but only "assumed" it. The ideas that the players and the collaborators came up with voluntarily will not stop at the planned presentations, and will be carried over to the next year of the project.

That being said, this project/program has only started, and it is very important to keep this community going in the coming years.

I also want to note here that, this project has given us the opportunity to rethink our existing values that give importance to mass-production, efficiency, and the scale of our products (i.e. the number of audiences and product reach), in the face of the pandemic. I truly feel that it was because of the fact that this project was organized with The Tokyo Metropolitan Government and Arts Council Tokyo, that we were able to not only realize the odd nature of our values, but also actually work on them.

To have individuals respect each other's differences and collaborate together. To let them move their hands and sweat together to create something. It is my hope that, organizing an art project that facilitates such activities regularly will help us prepare for our future co-existence and multicultural society, which will be critical in the coming years.

Yasuhito Yano, Beyond Invisible Borders Director

編集後記

記録集を作成するにあたり通年での活動を思い起こそうとしたところ、ほとんどの活動を上手く思い出せないことに気がついた。私の記憶力がお粗末なせいではあるが、コロナ禍においてたくさんの情報に晒され、様々な意思決定を迫られたことも無関係ではないと思う。それでもこうして記録集を作れたのは、諸々の活動を収めた写真や映像、あるいは活動の中で生まれた作品が残っていたからだ。記録にすること、作品にすることは、一つの活動に形を与えて終わらせるという側面がある。しかし、具体的な形あるものが残っているからこそ、そこに立ち返ったり、そこから何度でも始めなおすことができる。そのように考えると、長く活動を続けるためにこそ、活動の中で起きる一つ一つの出来事をしっかりと終わらせていくことが、思いの外重要なかもしれない。(寺門)

編集委員

寺門 信 (『kyodo 20_30』コラボレーター)
小林 真行 (『東京で(国)境をこえる』事務局)
三上 悠里 (『東京で(国)境をこえる』事務局)

テキスト

寺門 信 (『kyodo 20_30』コラボレーター)
小林 真行 (『東京で(国)境をこえる』事務局)
矢野 靖人 (『東京で(国)境をこえる』ディレクター)

デザイン

三上 悠里 (『東京で(国)境をこえる』事務局)

制作協力

川淵 優子 (『東京で(国)境をこえる』事務局)



本事業は「東京アートポイント計画」として実施しています。東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

In cooperation with various arts organizations and NPOs, Tokyo Artpoint Project pursues art projects with local community and citizen involvement as a way to foster an environment where everyone can be actively engaged in culture and to create and disseminate Tokyo's charm. The project is organized by the Tokyo Metropolitan Government and the Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture. <https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

主催：東京都 | 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京 | 一般社団法人shelf
Organized by Tokyo Metropolitan Government, Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), shelf Association

東京で(国)境をこえるに関する問い合わせ

東京で(国)境をこえる事務局(一般社団法人shelf内)
〒156-0045 東京都世田谷区桜上水3-9-6 スペーススクラ102
Tel: 090-6139-9578 / Fax: 03-5317-0802
info@tokyokokkyo.tokyo